第 12 回資源管理ワーキンググループ

議事録

日時：2018 年 3 月 6 日（火）10:00～11:30
場所：虎ノ門ヒルズ 8 階　役員会議室
出席者：崎田座長、杉山委員、臼井委員、古澤委員
　　小林オブザーバー（代理）、鈴木オブザーバー

※本議事録では、ディスカッショングループを「DG」、ワーキンググループを「WG」と記しています。

事務局：開会挨拶

崎田座長：おはようございます。施設の建設工事もだいぶ進んできており、多様な対策を考える重要な局面になってきていると思います。皆さんとしっかり議論しながら進めて参りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
　それでは進めて参ります。今回の議事内容について議事次第を見ていただければと思いますが、前回の振り返りと資源管理分野に関する意見等への対応について皆さんと共有し、三番目に大目標と全体的方向性、それから調達物品・運営時廃棄物の取組と分別基準についてということで今日も大事な内容が続きますので、よろしくお願いいたします。
　まず、前回の振り返りから始めた方がよろしいかと思いますので、事務局からご説明をお願いいたします。

事務局：資料 2 に基づき前回の振り返りについて説明。

崎田座長：ありがとうございます。前回の振り返りに関してご質問等あればと思いますがいかがでしょうか。前回も個別の事項について大事なポイントを皆さんにご発言いただいていると思います。こうしたものを一つ一つしっかりと内部でも意見交換をしていただければ有り難いです。特にこれに関してよろしいでしょうか。環境省の鈴木さん、最後のところに 3R 人材ボランティアについて環境省でも検討しているとあり、私も関わらせていただいておりますが、まとまった時にここで少し情報提供をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

鈴木オブザーバー：はい。

崎田座長：それでは、今日の意見交換に入っていきたいと思います。議事の二番目ということで、資源管理分野に関するパブリックコメントへの対応について説明をお願いします。

事務局：資料３に基づきパブリックコメントへの対応について説明。
P4 記載の食器のセキュリティや安全性に関するご意見に関しまして、年末に実施したパブコメ資料に「委員会等における主な有識者意見」として『食器のリユースは、衛生面もあるが、セキュリティ・安全性という面でも考える必要がある』という文章を記載いたしました。これは飲食戦略検討会議での意見を事務局が引用してご紹介したというものでしたが、引用した部分が資源管理 WG の皆様から出していただいた意見であるかのような誤解を招く表現になってしまいましたので、この場をお借りしてお詫びを申し上げたいと思います。

崎田座長：ありがとうございます。かなり色々といただきましたが、大目標については、この後の資料の意見交換のところでやりたいと思いますので、内容に関してご意見がある方いらっしゃいますか。

古澤委員：リユースカップの関係でご意見をいくつかいただいており、東京都で実施したモデル事業についても触れていただいております。リユース食器の安全性やセキュリティに関しては使い捨て食器とあまり変わらないのではないかというご意見は当然の話かと思います。元々、日本の場合は学校給食でもリユース食器を使っており、安全は管理されていると思います。
　また、都の主管部局もリユース食器関連で、何か事故があったというようなことはないと言っておりますので、この意見の通りかと思います。もちろんリユース食器であれ、使い捨て食器であれ、衛生管理に万全を期すべきことは当然であろうと思いますし、リユース食器の場合ですと、きちんとした洗浄施設で洗浄されるということでしたら、今のところ、衛生面の課題は見つかっていないと思います。都でも、関係の部局と調整をしているところでございます。来年度になってしまいますが、考え方をお示しできるかと思っております。

崎田座長：ありがとうございます。リユース食器に関してコメントをいただきました。パブコメに出した時の資料は、両面の意見が出ていました。IOC は安全性に関して強く重視しておられるので、安全性の視点もこの分野では大事ということを盛んに話し合ってきましたので、パブコメの資料に両面の意見をあのように出していただいたのは、その流れだとは思いますが、やはりリユース食器に関しパブコメで多くのご意見が出ているというこ

とでご発言をいただきました。日本の状況の中では、安全性を確保してやるということは最低限しっかりと考えた上で検討するということが大事だと思います。

古澤課長：今日はご説明までするつもりはなかったのですが、委員の方にはお配りしておりますが、都ではリユースカップのモデル事業をやって、今、正確なものを取りまとめているところでございます。

崎田座長：わかりました。配布資料は都のモデル事業として実施されたものということで、参考に拝見します。他にこの内容で何かありますでしょうか。ここではリユース食器の話もかなりご意見をいただきました。

あとは、レジ袋削減なども世界的な大きなうねりの中でもう一度しっかり、無料配布中止なり、リユース型の袋の使用をきちんと徹底していくということで、話が強く出ておりますので、この辺もしっかり考えていかなければいけないと思います。

食品ロスの話もかなりご意見をいただきました。資源管理 WG でも議論をさせていただいておりますが、食品ロス削減の徹底、排出された食品廃棄物の再資源化などについても、これからしっかりと意見交換をしていきたいと思います。

古澤委員：13 番、21 番、22 番で、森林破壊ゼロ「No Deforestation」という言葉が入っていますが、これについては後程、大目標との関係もあると考えておりますので、そちらの方で議論させていただければと思います。

崎田座長：では、大目標の時にもう一度ご発言をいただくということで。他に何かありますでしょうか。それでは、ご意見自体はしっかりと受け止めてやらせていただきたいと思います。

次のテーマに進みたいと思います。今日は資料 4 についてじっくりと話し合うために時間を使いたいと思います。よろしくお願いします。

事務局：資料 4（P2 まで）に基づき大目標と方向性について説明。

崎田座長：ここは今まで、色々なご意見を皆さんと共有してきて、共有したままになっておりました。少しじっくりと意見交換をさせていただきたいと思います。

私も一つ提案があります。先ほど、古澤委員がご意見があるとおっしゃったのはどの部分でしょうか。

古澤委員：では、先に述べさせていただきます。今回、パブコメの中で、「Sustainable Resource Use and Zero Wasting」「Zero Waste を目指す」というご意見をいただいたかと

思います。また、再生可能資源の持続可能な利用との関係で「No Deforestation」というのを盛り込むべきという意見も出ていたと思います。前回の DG の時に、森口先生は、資源管理分野において資源を使う側と廃棄物側の両方の側面があるということを明確にするために、「Sustainable Resource Use and Zero Waste」とおっしゃったと思います。パブコメのご意見、それから森口先生のご指摘も踏まえて考えてみたのですが、森口先生が先日出されたものが適切かと思い直しておりまして、「Sustainable Resource Use and Zero Waste」で入口側と出口側の両方があるということを明確にするということで、日本語にしても、「資源の持続可能な利用 / Zero Waste を目指す」というような表現がよいと思います。

合わせて先ほど少しお話した、森林破壊ゼロに関してですが、資源の入口側に関わる問題として、大目標に補足説明を付ける中に、「Zero Deforestation」という言葉を盛り込むべきではないかと思っております。入口側と出口側ということで言いますと、出口側の環境中への排出を減らしていくということについては、CO2 を減らすとか、埋立処分量を減らすとか、世の中的にも様々な議論がなされておりますが、上流側の特にバイオマス関係については、なかなか十分に議論されておらず、まだ社会の中に浸透していないという気がします。バイオマス資源の採取の段階では様々な問題があり、世界中で膨大な量の森林が減少しているというのが代表的な事例です。SDGs の中の、世界の森林減少を 2020 年までに止めるという大きな目標に関わっているということを我々は留意しないといけないと思います。

さらに、その森林減少に関わって、違法伐採や、密漁、人権侵害のようなことが多々あるということも忘れてはならないことだと思います。特に森林減少が食料の生産に結び付いているということから考えますと、出口側の食品ロスの削減というのを、上流側でそれに対応するものとして、やはり森林減少を何とかしないといけないという問題があると思っております。バイオマスだけでなく、その他にも、海洋生物の問題もありますし、金属資源においても上流で色々な問題があり、今回メダルに使う金属についても、しっかり配慮したものを使うということが IOC のルールになっているかと思います。そうした資源の上流側の問題について、この計画の中でしっかり情報発信していくことは大きな役割であると思っております。まずその点を申し上げます。

崎田座長：今の話を深めていく前に、私の考えを申し上げると、今のお話と直接関係する訳ではないですが、資源管理の大目標を立てるという時に色々考えたのですが、森口先生から Sustainable という意見も出ていましたが、脱炭素、資源管理、大気・水・緑・生物多様性等、人権・労働、参加・協働の全てのところで、結局は持続可能な社会に向かうというのが今回の中心的な考え方になっています。

そして、運営計画第二版の詳細項目を決めるために話しているということで、常に運営計画第二版の下で、大目標が「Zero Waste」とか「Zero Carbon」とかそういう話をして

きましたが、世界に発信する際には、最初にやはり Tokyo2020 は Sustainability をしっかり考えて運営していくということを英語できちんと発信する言葉を作らないといけないのではないかという印象を持っております。資源管理の話だけではないので、今後、持続可能性 DG などでもきちんと提案していきたいと思います。パブコメの全体のご意見の中に「Tokyo Challenge for Sustainability」という言葉があり、それでなければいけないという訳ではないですが、そのように、Tokyo2020 は Sustainability の実現にこだわって、しっかりと運営をしていくということを明確に発信するための一言を入れて、そして、「Zero Carbon」や「Zero Waste」もちろん「Zero Waste」はこれからどれにするかということを話していくことになりますが、やはり Sustainability という言葉をしっかりと明確にした上で、それぞれの目標を位置付けていくような建付けにした方がよいと思いました。それは持続可能性 DG でも提案していきたいと思いますが、そういうことに関するご意見も含めて、是非意見交換をしていただければ有り難いと思います。

事務局：情報提供ですが、今回の東京大会の持続可能性に関する主要テーマは五つございますが、これに横串を刺して、持続可能性配慮に関して東京大会として発信すべきワンメッセージについて、コミュニケーションを担当する広報局とともに検討を始めたところです。今後、検討状況を含めてご報告させていただきます。

崎田座長：検討し始めたワンメッセージというのは Sustainability に関することをしっかり入れるという意味で理解してよろしいですか。

事務局：はい。ロンドンでも「Towards a one planet 2012」という言葉が出されていましたが、どういう形になるかは別としまして、東京大会での持続可能性配慮の目指すべき方向性というのが言い表せるようなものを検討し始めたという状況です。

崎田座長：その検討の際に、資源管理 WG でもそのような意見が出たということをお伝えいただければ有り難いです。意見交換が盛り上がったかどうかは、これから皆さんにご意見を伺いますので、その様子でお考えいただければと思います。ワンメッセージをしっかりと検討を始めたというお話で、その方が明確になると思いますので、是非そこをしっかりとやっていただければ有り難いと思います。とりあえず、皆さんがお考えのところを出していただいた方がよいと思います。

杉山委員：まず、今、お話の出ていた全体の横串を刺すようなメッセージについては賛成です。それがあって、それぞれ資源管理などの大目標があるというのが自然だと思いますので、進めていただければと思います。

次に大目標をどれにするかという話ですが、その前に確認させていただきたいのは、今

日はご本人がいらっしゃらないので恐縮ですが、元々、「Zero Waste」というのが最初にあって、それだと限定されてしまうので、「Zero Wasting」がよいのではないかということを森口委員がお出しになったと記憶しているのですが、その「Waste」から「Wasting」になった経緯をしっかり踏まえておかないと、前の話が置き去りになっているような気がするので、まず「Waste」なのか「Wasting」なのかという辺りからもう一度整理した方がよいと思います。

崎田座長：それについては、この後、事務局からコメントをいただければ有り難いと思います。他に今回考えるポイントとして何かご意見はございますか。

臼井委員：先ほど、古澤委員から人権なども踏まえて資源の目標は考えるべきとのお話があり、持続可能性を考える上で、そういった視点は大事だと私も思います。
　ただ、「Sustainable Resource Use and Zero Waste」は少し長いと感じます。「Sustainable Resource Use」と「Zero Waste」は持っている理念は基本的には似ているところがあり、一言で言えることは比較的シンプルにした方がよいと思います。全体のワンワードがあった中で、さらに各分野のワンワードがあるという作りがよいのではないかと考えます。

崎田座長：今、委員の皆さまから課題をいただきましたが、オブザーバーのお二方はこれから話す議論のポイントとして特にお考えはありますでしょうか。

鈴木オブザーバー：元々、入口の議論と出口の議論があり、それを森口先生がご指摘されていたと思います。表現の仕方は色々、皆さんにご検討いただく必要があろうかと思いますが、捉まえ方としては このスタンスでよいかと思います。

小林オブザーバー：今出ている三つの中で、どれがよいかというのは皆さんにお任せしようと思うのですが、先ほどの横串のメッセージの検討スケジュールが今後どうなっていくかわからない中で、そちらを気にしすぎてしまうと、逆にこちらの検討に手戻りが生じてしまったりするので、これはこれで、単独で意味がわかるような形で議論をしていくという方がよいかと思います。

崎田座長：ワンメッセージを検討するということは歓迎するとしても、それにこだわりすぎずに、資源管理分野は皆さんが納得する大目標を立てた方がよいというご意見でした。
　「Zero Waste」から「Zero Wasting」になった時の議論のいきさつというご質問が杉山委員からありました。まず事務局はどう捉えているかお話いただけますか。

事務局：数回前の WG になるかと思いますが、元々立候補ファイルの中で「Zero Waste」

ということを示しておりましたが、「Zero Waste」ですと想起されるのが、ゴミということに偏りが出るのではないかというご意見がございまして、より資源管理全体を見渡して、さらに資源管理だけではなく、脱炭素や生物多様性等との波及効果もあり、あとは「Waste」という単語にはゴミというより、ムダにしないという意味合いもありまして、ing を付けることでそういうことも出していけるのではないかと、そういった経緯があって「Zero Wasting」というご提案があったという認識でございます。

崎田座長：今のお話の通りです。

杉山委員：そうであれば、「Wasting」というのはかなり広い概念ですので、「Resource Use」や「Sustainable Resource Use」を付けなくても、「Zero Wasting」でインプットもアウトプットも含まれると解釈できるのではないかと思いますので、なるべくすっきりと覚えやすいということを考えると、個人的には「Zero Wasting」がよいと思います。

崎田座長：シンプルに「Zero Wasting」という形で明確に言ってよいのではないかというご意見が出ました。私の意見を言わせていただくと、意見がたくさん出てきた際に「Zero Waste」でよいのではないかと思っておりました。なぜかと言うと「Zero Waste」は、単にごみ問題だけでなく、資源をしっかりと活用するところから始まる全体の話という考え方で「Zero Waste」の研究が始まったと理解しています。ですので「Zero Waste」だけで、しっかりと全体の循環のことが伝わるのではないかと思い、また立候補ファイルに「Zero Waste」と明確に書いてあるならば「Zero Waste」でよいのではないかと思っていたのですが、その後の意見交換で先程のように、やはり日本の中ではもう少し、しっかりと「Zero Wasting」という新しい言葉で広くした方がよいのではないかというご意見が出た時に、それは賛同いたしました。
　私もできれば「Zero Wasting」とシンプルでよいのではないかというのが個人的な意見です。今まであまり申し上げませんでしたが、そろそろ最終段階ですので、皆で意見を言っていかなければならないと思い、一言意見を申し上げました。

古澤委員：森口先生の言い方ですと、資源と廃棄物の両側を含んだメッセージということでしたので、元々「Zero Wasting」と話していた時にも、そういう趣旨で話しておりましたが、恐らくパブコメで意見が出て「Zero Wasting」という言葉がうまく通じていないというところがあり、森口先生はあのようにおっしゃったのだと思います。要は表現の仕方だと思いますので、私も長いものにこだわっているということではないです。事務局に示していただいたように、下に説明をしっかり加えるというやり方もあると思いますので、表現の話かと思います。

崎田座長：今日絶対決めなければいけないという訳ではないと思うのですが、そろそろ収束の意見交換をしなければいけないということで、意見を出していただいております。そういう理解でよろしいですか。

事務局：今までご議論いただいたように、入口と出口の両方を含めているということが、はっきり込められればよいと思います。恐らく「Zero Wasting」がよいとなった時に「Wasting」が入口出口の両方をカバーしているということが伝わりにくかったのではないか。その結果「Resource Use」を付けたり、あるいは、長く説明をしたのではないかと。とはいえ、伝わらないと仕方がない。どの辺りの表現が一番伝わりやすいのか、「大目標」の中に全てを盛り込むのか、また「大目標」では盛り込まずに、「全体の方向性」の中できちんと入口と出口がわかるような形で書き込むのか、という選択もあると思います。

崎田座長：今、各 WG で大目標を入れて、その大目標をきちんと伝えるような一言を入れるという、それがこの下の修正案、資源管理の全体的方向性のところの文言という理解でよろしいですね。

事務局：そうです。 ①②③と下にあるのが、循環経済の中のフェーズを踏まえており、入口と出口を表現しています。

崎田座長：大目標の次にリード的に何か文章を入れるという中の想定として今、例えば修正案の方で出て来ているのは、「資源をムダなく活用し、資源採取による土地の荒廃や廃棄による環境負荷を抑制する」とあります。現状と修正案の辺りについて、この後もう一回意見交換をしていただきますが、その上にある一文としては「Zero Wasting」というシンプルなものでもよいのではないかという意見も今日はかなり出たということで、留め置いておこうと思います。それでよろしいですね。

事務局：大目標というのは短い方が浸透しやすいのと、もう一つは下の文章できっちりと説明されているのであれば、それで理解されやすいのではないかと思います。

崎田座長：今日の意見交換の中では、大目標はやはりシンプルにメッセージ性を強く出すために「Zero Wasting」という、この言い方でよいのではないかという意見がかなり強く出たということにしておいていただければと思います。下の方向性に書く文言については、現状と修正案に関して古澤委員からも意見が出ましたが、ここに関して何かご意見はございますか。

杉山委員：私も先ほど古澤委員がおっしゃった「No Deforestation」に関する文言を何らかの表現で入れていただきたいと思っております。前回の DG には出られませんでしたが、その時には木材に関する調達基準のお話も出ていたと伺っております。先ほどのパブコメへの対応のところでも、「森林保全の趣旨も取り入れた調達基準を策定しており、これに沿った調達を進めて参ります」とあり、もちろんその通りですが、やはり、この資源管理分野でもきちんと森林資源を保全するということは、明確に打ち出したいという想いがありますので、大目標を説明する中には、その想いも入れ込んだ形に是非していただきたいと思っております。

崎田座長：この修正案に対して賛同するご意見が出ました。違うご意見はございますか。

臼井委員：五つのテーマの上に付く大きなメッセージにつながるような文言になるとよいかと思います。

古澤委員：先ほど、杉山委員がおっしゃったことと重なる部分もありますが、木材の調達について先日の DG で議論があって、座長からも調達 WG で話して欲しいということであったかと思いますが、木材に関して言うと、今回のパブコメへの対応のところにも、「調達基準を策定しており、これに沿った調達を進めている」と書かれていて、あるいは、調達基準に適合している云々の話もありますが、目的は持続可能な資源の使用であって、その手段として調達コードがあるということになっていますが、決めた手段の通りやっているから目的は達成されているんだという風になると、目的と手段が混同してしまうという感じがして、論理を整理する必要があるのではないかと思います。

そのためにも掲げる目的、例えば資源管理分野ですと、再生可能資源の持続可能な利用、あるいは生物多様性に関しては生物多様性に配慮した資源の消費というようなコンセプトを出していますが、何を目指して、木材にしても他の資源にしてもそうですが、こういう調達をやっているのかというところも含めて、目標にしっかりとした理念を盛り込む必要があると思います。それで、一つホットな言葉としては、「Zero Deforestation」などもあると思っております。

お配りさせていただいた資料は、1 月に林野庁主催で行われた国際シンポジウムの資料でして、国際的にも大きな議論になっているということだと思います。先ほども話しましたが、SDGs の目標 15.2 で森林減少を 2020 年までに止めるということが掲げられておりますので、ホットイシューかと思います。資料の中にモデレーターズ・サマリーということで、このシンポジウムの総括のようなものをお配りしておりますので、こちらも読んでいただければと思います。

日本企業でも「Zero Deforestation」や「Zero Net Deforestation」という形で掲げている企業が徐々に出て来ていると思います。先月、ブリヂストンさんがこれを掲げて話題に

なっているというようなこともありますので、そういうところが欲しいなという気がします。ただ、数値目標として、サプライチェーンの森林減少ゼロを掲げられるかというと、これはいくら何でも少々無理があると思いますので、大目標や目指すべき方向性のところで入れていった方がよいかと思います。

崎田座長：今のお話の最後にあったように、数値目標などを入れるのは、なかなか難しいかもしれないが、特に世界が参加するこのような国際的な一大イベントで世界の関心事にできるだけ感度高くいるということを示すということはメッセージとしては必要ではないかということで、ご提案いただきましたし、委員の意見からもそれに賛同する意見が出ておりますので、今日の WG としては、この修正案の方向性でどうかということで、置いておきたいと思います。よろしくお願いいたします。
　それでは、次の調達物品・運営時廃棄物について、これが大事なところですので、ご説明いただき、意見交換をしたいと思います。

事務局：先ほどの修正案で、「土地の荒廃や」というところがありますが、土地の荒廃だけではなく、水質関連や大気関連も含めた方がよいと考えておりまして、そういう意味で「荒廃等」と修正させていただくというのはいかがでしょうか。

崎田座長：より感度を高くする修正であれば、よろしいのではないかと思います。

事務局：資料 4（P3～P6）に基づき調達物品・運営時廃棄物の取組と分別基準について説明。

崎田座長：これは、今日初めて出てきた資料ですので、じっくり見ていただいて、色々なご意見が出ると思います。特に後半の分別基準案のところは色々あると思いますので、できるだけ今は、皆さんがこういうところを大事に考えたいというような、ポイントを話していただければ次に続けると思いますので、よろしくお願いします。
　確認ですが、先ほどから、日本でもロンドンと同様のことはできるだろうというご説明があり、P4 で例えば物品調達の際にロンドンは 90%以上という目標ですが、現実は 99%できた、運営時廃棄物は目標 70%以上でしたが、現実は 62%であったということを踏まえて、東京はどうするかをこれから考えるという意味でよろしいですかね。目標と現実が違う訳ですよね。

事務局：運営時の廃棄物というのは、なかなか想定が難しいところもありまして、ロンドンを参考にしながら検討しているという状況です。

崎田座長：先に一つ質問させてください。東京の運営時廃棄物について、どこから、どのくらいという想定の検討を内部でやっておられると思いますが、そういうのは最終的にいつ頃出て来る予定でしょうか。

事務局：なかなかそこの見通しも立たないところでありまして、ロンドンを横引いたら、どれくらいかということを検討しています。

崎田座長：皆さんから色々とざっくばらんに意見やポイントを出していただければと思います。

杉山委員：P6 にお示しいただいた、分別基準については、これはこれでなるほどと思って拝見しているのですが、これから運営をしていく段階で、発生源で分別できればそれはよろしいのですが、どうしてもそれが難しい場合には、後々の選別で対応するということも可能ではなかろうかというように思います。基本は発生源で分けるというのはその通りで何の異存もないですが、ある程度、選別で対応できるところはそれも考えながらやっていかないと、これを全て分けるということになると、もちろん医療系廃棄物などはどこでも出る訳ではないと思いますが、必ずこれを分けることありきであると、すごく苦しくなるのではないかと心配を感じております。

崎田座長：発生源分別とバックヤード分別の両面の可能性を適切に考えたらどうかというご意見ですね。

杉山委員：そうですね。収集した後に分けるという方法もありだと思います。

崎田座長：そういうご意見で、私、一言申し上げると、最初の分別基準案としてこの表が出て来てすごくよかったなと思うのは、やはりこれだけ素材の違う物が、多く出て来ると、今の日本国内では、例えば駅など、色々なところで国際的な流れよりはかなり分別が進んでいると、それに対して、明確にこういう分別基準案が示されたということは、きちんとある程度、やることは目指しておられるということが、はっきりわかってきたので、そういう意味では、この表をまず出していただいたことが非常に大事なことで有り難いことだと思います。その上で、選手あるいは観客がいるところで、ここまで分別するかどうかという辺りはしっかりと考えた方がよいというご意見と受け止めました。

古澤委員：今のお話ですが、まず出すところの分別があって、それからバックヤードでさらに選別をかけて、その後に持っていった先での選別というように大雑把に三段階あると思います。例えば駅なども、かなりバックヤードがしっかりされていて、JR さんなどはそ

ういうシステムを持っていらっしゃって、ご自分の施設で分けてしまうというやり方をされています。

正直、今の競技会場の仮設のプランニングの中では、バックヤードはスペース的にかなり厳しいと思います。それから、持って行った先についても、どこまでできるかというのがあり、現実にはそれぞれのボリュームにもよってしまうと思っておりまして、例えばペットボトル等は相当多いだろうと。ペットボトルが多いとペットボトルのリサイクル施設に持って行くしかないだろうと思いますが、そうなった時に、ラベルやキャップを外して持って行くのは正直無理だろうと思いますし、持って行った先に缶が少しだけ入っていたという程度であれば、残渣の除去で対応できると思うのですが、それも含めて選別をしてねという委託になると、受けられる企業があまりないというところがあるので、慎重に考えなければいけないと思います。

紙の場合も、今、古紙問屋さんで受け入れ基準等もありますので、実施の時には、それぞれの項目について、どの施設にどういう条件で受けてもらうのかというような受け側の事情を考慮して設計していかなければならないと思います。

崎田座長：こういう方向性を示していただくのはよいが、具体的に実施する時には一つ一つ精査が必要になるというご意見でした。

事務局：例えばプラスチックでその他プラと書いてありますが、現実問題、会場なり選手村なり、オフィスで、レジ袋が使えるか、あるいは会場に持って入れるのかとか、紙袋はOK なのかといった条件によって発生の度合い、ボリューム感は随分と変わります。その分別の方法も、バックヤードのスペースのお話がありましたが、後分別をどうするかということもしっかり決まっていない中、想定で作っています。今後、実践議論は当然必要になっていくと思います。

崎田座長：今、お話がありましたが、例えばレジ袋なども、今できるだけレジ袋に頼らずに何度も使えるような袋にという大きな流れの中で、オリンピック・パラリンピックにおいても、どういう取組をするのか、かなり期待されている訳ですね。そのようなことを話し合わないと発生量予測というのはできない訳で、おっしゃる通りですので、そういうものと、こうした実施の部分と両方を見ながらきちんとした具体的な話をしていくことが重要かと思います。

あと、ペットボトルについて、資源化の欄に、ペット樹脂/繊維と書いてありますが、運営計画第一版には、都市鉱山メダルプロジェクトともう一つペットボトルの最近の再生技術でペット to ペット、もう一回ペットにするというものを採用すると書いてあるのですが、そういうことも考えればペット樹脂と書いてあるのがそのことを言っているという理解でよろしいでしょうか。

事務局：この欄は、こういう資源化の想定があるという意味でございますので、こうできるというのはこれからですが、樹脂というところでは、ペット to ペットも含まれることになると思います。

崎田座長：ペット to ペットも一回樹脂に戻してボトルにするので、ここに書いてある範囲の中かと思います。この表は今回出していただいたことに大変意味があると思います。それで、こういうものも踏まえながら、現実の運営上のシステムを考えていくとか、そういうことと両輪で回していくというそのスタートとして、資料をいただいたという理解で進めたいと思います。この段階で今の資料に関してご意見、特に環境省は色々と所管しておられますので、鈴木オブザーバーお願いします。

鈴木オブザーバー：実際にこういう形で分けていただくのは大変有り難いと思います。入口論として、どのくらい量が出るかというのはもちろん、その先、集めた後に再資源化する、あるいはそれをリユース・リサイクルするというところで、色々な技術を持っている方々がいらっしゃいます。そういったことをもちろん発信もしていくべきだと思いますし、先ほどのペットボトルの話もそうですが、空気を運ぶような状況になってしまうので、現場で潰すようなオペレーションができれば、その後の輸送コストの軽減につながります。最後の出口のところまで含めて、トータルで分別をどうするかを考えていく必要があると思います。

小林オブザーバー：「各会場個別に方策の検討をする必要がある」と書いてありますが、ここがかなり重要ですし、厳しいところでもあると理解しました。ただ、個別の議論となると、時間の掛かる話ですので、全体としてうまく整理できるところと、各論に入っていくところと、両輪でとありましたけれども、各論の方にあまり引っ張られすぎても、時間だけが経過してしまうということもありますので、切り分けて議論していく必要があると思います。

崎田座長：きちんと全体のバランスを見ながら進めたいと思います。今の資料は大事な資料ですが、これから皆さんで、この辺を踏まえてしっかりと話し合っていくということでよろしくお願いします。
　最後に今後の予定についてご説明いただいて、終わりにしたいと思います。

事務局：資料 4（P7）に基づき今後の予定について説明。

崎田座長：3 月末あるいは 4 月上旬辺りにまた次の WG を開催するという予定となってお

ります。その辺でまた、分別基準等についてもしっかりと意見交換をしていきたいと思います。事務局にお戻しします。

事務局：本日は貴重なご意見ありがとうございました。運営計画第二版の 6 月発行に向けて引き続きよろしくお願いします。

以上